

医療ルネサンス

No6122

高齢者の薬

6/6

鎮痛薬で胃潰瘍、食欲不振

「胃がむかむかして、食事がのどを通らない。1か月で体重が5kg減った」

そう訴える独り暮らしの男性Cさん(79)が今年5月、東京都江東区の東京城東病院の内科外来にやってきた。脱水、貧血、血圧低下など、衰弱が著しく、そのまま入院することが決まった。

食欲不振は数か月前から続いているといい、胃の内視鏡検査を行うと、直径3cm程度の胃潰瘍ができていて、そこから出血していることが判明した。貧血は、栄養失調だけでなく、胃の出血も影響しているとみられた。それにしても、どうして、そんな大きな胃潰瘍ができたのか――。

総合診療医の本橋伊織さんは、Cさんの薬の記録をチェックして、以前から使っていた強力な痛み止めの座薬に目を留めた。

「非ステロイド系消炎鎮痛薬」と呼ばれるタイプの薬だ。腰痛やひざ痛などを訴える高齢者によく処方される。痛みを抑える反面、胃腸を傷める副作用が出やすい。長期間使い続けて潰瘍が悪化すると、胃に穴が開くこともある。

Cさんも、慢性的な腰痛を抱えていたため、受診した整形外科で、この薬を処方されていた。

入院中に、この非ステロイド系消炎鎮痛薬の使用をやめ、胃薬を飲むことで、胃のむかつきは消え、食欲も戻った。

ただ、Cさんが訴えていた痛みは単なる慢性的な腰痛のせいだけではなかった。本橋さんが、背中の腫れに気づき、画像検査をすると、背骨の圧迫骨折と肋骨骨折が見つかった。これに対しては、背骨に負担がかかりすぎないようコルセットを巻いて保護

患者の記録を見ながら、処方されている薬の必要性を検討する総合診療医たち(東京都江東区の東京城東病院)

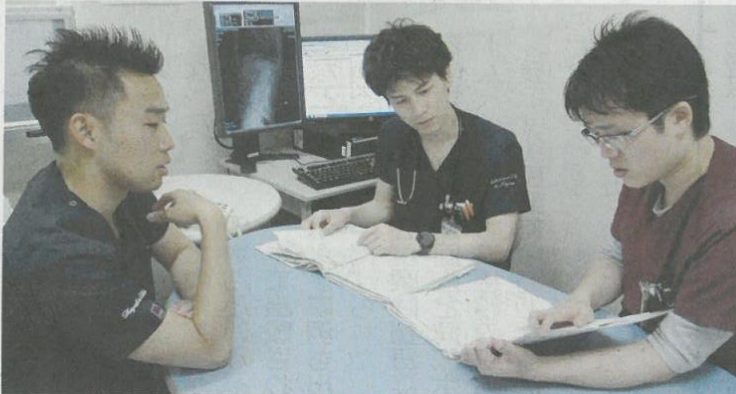
し、安静にして骨がくっつくのを待った。

「痛みの原因に目を向けず、強い薬を足していくだけでは、効果より副作用の害が大きくなる危険もあります。Cさんのケースを見て、そんな思いを改めて強くしました」と本橋さん。

元々Cさんは、複数の内科や精神科、整形外科に通院しており、計20種類以上の薬を処方されていた。骨折のきっかけは本人に聞いても不明だが、大量の薬の相互作用でふらつきなどを起こし、どこかで背中をぶつけたら、尻餅をついたりした可能性も否定できないという。

Cさんの場合、約1か月間の入院期間中に、副作用が軽い別の鎮痛薬、胃潰瘍の治療薬、ぜんそくの薬、高血圧の薬など、6種類に整理された。経過は順調で、さらに胃潰瘍の薬などは減らせる見込みだという。

(高橋圭史、館林牧子) (次は「片頭痛治療の今」です)



くらし

家庭